



早稲沢分校の子供達/昭和37年頃



買い出しの為に大塩まで旧米沢街道を歩く/昭和29年



全国僻地大会/昭和33年

## 国立公園指定の頃の生活

阿部久仁於

国立公園指定となった当時、裏磐梯には、宿泊地となる旅館がなかった。各集落毎に「便利屋」ともいう客を泊める家があつて、商人、葉売り、工事関係者が泊まっていた。厳冬の吹雪は凄い。「窓雪三日」というが、雪降りて荒れた日は一歩も外へは出られない。雪降り止んで三日も一週間もかけて晴れを待つのだ。宿の無い時代だからどの家にもお願いして「身の安全確保」をしたものだ。最寄りの家へ吹雪の止む間、世話にならなければ安全が確保できなかった。どの家でも構わずお願いして泊まり歩いたものだ。

「俺たち三度も死んだ」というおばあちゃんの話聞いた。「猪苗代町で東京華やかな踊りの映画を見てきて、喜び帰ったのはいいが、バスを降りたら深い雪、あの年は降つたな。みるみるうちに腰までだったが時間がたつと胸までの深い雪。新雪とあつてスキーは役に立たない。向こうには明かりがチラチラ見えるのだが、胸まである雪を押し分け押しての一步は疲れたし、一キロの道を五時間もかけ、ようやく家へ着いた時は死んだも同然。疲れた体を投げ出してバタンキューだった。」一生のうち三度も雪のため死んだも同然、雪降りの歩行は大変な時代を過ごしたというおばあちゃんたちである。猪苗代町へ行く雪の道、何人か前に歩いた雪道は踏み固め馬の背のようになっていて、踏み外せばドドツと雪中にぬかつてしまう。歯医者に

行つたおばあさんは、町歯科医で治療を済まして帰宅したが、一四キロの雪道の往復に「片道四時間はかかったな。」という。

公園と呼んできた松原湖南岸に紅柳館という木造二階建ての旅館があつた。剣ヶ峯の阿部豆腐店が旅館へ豆腐を届けていた。会津バスは砂利道を粉塵を巻き上げ走る。豆腐を紅柳館へ届けるのもバスで運んでもらう。豆腐屋では井戸も掘つたが、鉄分が多くて井戸水は使えない。村人は茶を飲むのにも湖水の水を飲み、豆腐屋も湖の水を使っていた。リヤカーに積んだ箱に水を汲む。大きな箱へ湖の水を汲み運んだ。家へ着くまで、途中こぼれ落ちていっばい汲んだ水は半分くらい減っていた。

昭和三四年裏磐梯小中学校が新設されて「学校へ水」の願いから、簡易水道設置運動に地区民の関心が高まつて行く。車の走る間は不自由ながら生活出来たが、冬、雪が降れば各集落は「陸の孤島」となった。除雪車の無い時代はバスも来ないし、車も通れない。早い時で一〇月末から雪が降ることを覚悟しなければならなかった。雪解けを待つ五月始めまでは沈黙の世界である。じつと春を待つ。猪苗代町から馬そりが来た時は嬉しかった。秋が来ると各家は越冬用の食料の荷揚げが大変。雪降る前には暮らしたに必要な物品は確保しておかねばならず、夏働いた分、冬食べてしまう。そんな暮らしの繰り返してあった。冬、松原三湖は完全に水結す



早稲沢から松原本校にスキーを履いて松原湖を渡る/昭和28年1月

る。村人は水結した湖を渡る目安として狐など動物が湖を渡れば人間も渡ってきたという。急患だというと、集落の村人は総出でソリに患者を乗せ水結した湖を渡って車の来る所まで搬送していた。また、村では雪上車を購入し緊急時に備えて稼働していた時代もあった。お正月用の荷揚げも大変なもの、集落総出でソリで荷を運んだ。ソリ引く列は働く人々で見事であった。

昭和四二年（一九六七）三月五日の毎日新聞は「氷ゆるむきよう危険な湖上通学」という見出しで報じていたことがあった。「北塩原村早稲沢、金山地区から松原湖対岸の松原小中学校へ通う七三人の学童、生徒たちは、一月中旬から水結した湖上を通学している。ふだんの通学路は雪で埋まり、村に除雪費がないため、湖上通学は数年来の慣習になっている。しかし、この通学が安全という保証はない。『昔から彼岸までは氷が割れない』という村人たちのカンだけ。昨年春先に氷が割れて大人が落ち込んだ例もあり、幸い助けられたが危険とは背中合わせ。ここ二、三日は暖かい日が続いており、学童たちは毎日、命がけの通学をしている」と報じた。真摯梯中学校に通学する生徒も長峯地区は松原湖を、小野川では小野川湖の水結した湖を渡ってきた。この年の冬から松原へは除雪車が入り、冬の陸路も除雪して安全になった。た。



早稲沢分校の子供達/昭和40年頃



炭俵をこれから運ぶ。小野川集落

雪が摺梯山の麓から消えていく頃、麓の川上までバスが来た。五色沼入口まで入って来たという話しに村人は心うきうきしたものだ。バスは麓から春を運んできたものだ。山の上の集落までやって来る春、もうすぐ元気で働ける春も間近だ。そんな春の日春神楽がやってきて笛と太鼓で賑わったものだと言す。雪解けを待つ嬉しさ、春からの生活を待ちわびた村人も多かった。厳しい冬の季節を過ごせば、冷ややかに過ぎたし安い夏場。避暑地としての真摯梯には、多くの観光客も訪れ村人の客を迎える活動が盛んとなるのである。



曾原開拓地に電気より先にバイクが入る/昭和34年頃



炭俵（ツゴ）を編む/昭和31年